針葉樹會報

通巻第六十四號

國師迷路行（其二）

孫

密林の一夜は明けた。昨夜は星月夜だつたが今朝は一面に曇つてどうやら氣遣はれる空相になつてきた。早速現在居る地點の評定にかゝる。秩父の大家達（昨日の迷路振からすると甚だ怪しい大家である）が散々討論した擧句、「こゝは、國境尾根に併行する國境に最も近い尾根上の一地點である。だからこゝから東に向つて進めば間もなく國師と奥千丈（△點のある方）を結ぶ尾根の中間に出るからそこから國師を經て大弛の小屋へ出れば、晝飯を焚いて悠り休める。こゝからまあ三時間半か四時間位だらう」といふことにきまつた。が其推定を確めるために斥候を出さうといふことになり、琴川遡行の提案者望月と、修業のためにといふので岩崎とが空身で出かけた。やがて一時間餘を經て本隊の一同がそろ〳〵不安を感じはじめ「ヤツ、ホー」を繰返してゐると二人の姿が密林の中から現れてきた。

「推定に間違はありません。奥千丈の尾根に出ます、が一寸御相談があります、といふのはこゝから約三十分程進むと栂の稚木の猛烈な藪になります、空身の僕達が辛ふじて通れた位ですから荷があつちや六ケしからうと思ひます、どうしますか？」といふ望月の報告だ。一同は顔を見合たが退けば昨日の迷路、進めば藪潜りだが目的の國師へ出られることが確實になつた以上突進第一と決心して直に出發した（七時半）。暫く東進すると成程ひどい藪が始まつた。一間先の仲間はもう見えない。身體は漸く通るがリュックが引かゝつて龜の子の宙吊りとなり、足許には倒木が待ち構へてゐるといふ難行を繰返して一時間後に稍々疎な地點に出た。早速手近の大木に登つて地形を觀察すると、近いと思つた國境尾根は案に相違して紫色に霞んで見えるのは天氣のせいばかりではないらしい。然もすぐ手近に聳えてゐる一峰は二、六〇〇米の奥千丈では無いやうだ。

「熊さん、一寸登つてきて見てくれ」

と木登りの不得意な熊さんを無理に引張りあげて意見を聞くと

「俺はあんな頭の二つに見える國師は見た事が無い」

と云ふ。それは今回初めての地點からの觀察だから仕方がないとしても、紫色のあの國境尾根へ出るには三時間はかゝるに違ひない。さうするとこゝはまだ可成低く精々二千二、三百米だらう、と一時は悄氣たが猛然突進することにして、微な踏跡が尾根筋にあるのを幸ひそれを傳つて進む。此頃から天氣は愈々崩れて降り出して來た。十時、三角點のある突起を過ぎる。地圖の奥千丈だ。

「二千六百の奥千丈に三角點は無かつたでしょうか?」

と望月が狼狽氣味に訊く。此事はもう既に覺悟して居た。こゝから見下せば一行がビバークした尾根は遙に低く、國境尾根は遙に高い。我ながら淺間しい處へ寢たものだ。只管北進する。路は段々明瞭になつて氣分は樂になつたが、雨は愈々強くなつてきた。現役軍の柿原がどうやら顎を出しかけてきた。十二時、國師の三角櫓を右上に眺めつゝ小さな鞍部に出た。此頭が前國師とでも云ひたい突起で、さつき熊さんの云つた「二つ頭のある國師」は即之と三角點のある本岳とを南から眺めた譯だ。こゝまで來ると雨は霙に變つて南からピユー〳〵吹きつける。眺望も何も無い。一散に大弛めがけて急斜面を降る。十二時十五分、待望の大弛小屋へ着いたが、飯を焚く所では無い。愚圖々々してゐると梓山發の最終バスに間に合はぬかも知れない。又情ないパン食だ。雨に濡れた薪はどうしても燃えつかない。石油こんろで間に合はして、ふるえながら實食だ。こゝで、明朝までにはどうしても東京に歸らねばならぬ中川、近藤、吉澤のO・Bに、風邪氣味の柿原を加えた四人は、今夜こゝに泊り明日天氣になつたら甲武信へ行くといふ望月、岩崎の兩君に別を告げて、「信州側の澤ならどこでも降れる」といふ秩父の憲法を信じて、小屋の直ぐ西から降つて居る未知の澤（歸京して文獻を調べたら魚止澤だつた）に踏み込んだ（一時二十五分）。源頭は極めて陰慘だつた此澤も暫く降つてゆくうちに大分明る味を帶びてきた。豫想した通り、大した瀧や惡場も無いらしく幾度か渡渉を繰返して無事に降つて行つた。雨は依然として強く、それに加えて崖へつりと藪潜りの連續でどうも頗る不愉快だが、無事に降りたい一心で緊張した澤降りが續く。二時十分、右手に可成の瀧を見る。澤の出合だ。澤の傾斜はさして強くはないが時々三、四米の瀑や滑に出合ふ。約一時間半降つた三時頃、四、五十米の滑の先端が俄然二十米位の瀑になつてる所へぶつかつた。愼重に左岸から右岸へ渡り、右岸の藪を利用して飛沫に濡れながら無事に降り終へた。振り返れば瀑は中途に二段程の淺いテラスがあり、瀑壺はさして深くはないが、瀑の上流の滑でスリップすれば相當の怪我は免れまい。ホット安堵して足許を見れば、有難や木馬道がついてゐる。もう澤渡りは終つた。俄に足は勇んで一散に降る。三時二十五分、右手から、國師登山道が合して牧場は近い。こゝまで來ると熊さんは例の得意のホームスピードを出して脊中までハネを上げながら泥濘の路をタンクの樣に突進してゆく。雨に煙る此あたりの紅葉は、今日の難行の最後を彩る美しいなごやかな眺だつた。四時、金峰川に架けた橋を渡り牧場の柵を抜けて川端下道に出た。もう秋山までは一時間餘の

2

道のりだ。物靜かな川端下の山村を過ぐる頃雨は漸くあがつて暮れやすい秋の夕がほのかにしのびよつて來た。無言の四人の跫音のみがあたりの靜寂にこだましてゆく。　（孫　一）

註、此行で望月は完全に四月の神樂行の失態をとり返す程の働き振を示してくれた。しかし學生部隊の薪作りと火起しの下手なことは、石油こんろにのみ賴つてゐる弱點を暴露した。一段の修業が望ましい。コーチは敢て辭さない。

甲武相の國境ひ三國山に登りて

K

幾させか距つる年の春の日に訪れし山　今日も亦見ゆ
きりぎしに高くかゝれる釣橋の上に踊るよ朝の光は
手鼻かみそでに鼻じるすりつけてきりぎしの徑一人行くかも
澤細み雜木林の尾根の上におゝらにかゝる白き雲へあり
炭燒徑　一人し行けば大雉の羽ばたき高く飛び去りにけり
見上ぐれば陣場が峰に落陽の一時(ひと)映えて暮れ行けるかも
向ひ山　すでに霞みし街道に烏の一羽低く舞ひ行く

大瀧山より蝶ケ岳へ　（二）

【近藤生

其の翌日

昨日あんな天氣工合が惡かつたのに今日は又物凄い快晴である。昨夜から熊さんは仲間の顏振れから見て明日の晴天を確信して居たので、熊さんが得意な顏をする事〳〵。是では本年三月の木曾御嶽の時と全く同じである。

然し朝になつてもぺんちやんは元氣がない。澤山の山海の珍味も横目に睨んで居る始末であつたので、餘り食べない僕と熊さんではどうする事も出來ない。總てはぺんちやんの爲めに用意して來てあつた食料品なのである。

相談一決して熊さんと二人午前中に蝶ケ岳迄行つて來て、今日は小倉道を松本へ出ようと云ふ事にして二人で殆んど空身になつて出掛ける。

朝の清澄な大氣を通して富士山を始め御嶽乘鞍と皆んな眞白になつて、雲海の上に浮び出て居る。そして直ぐ目の前には槍ケ岳から前穗高迄其の峻險な岩壁を美しい雪稜が線を引いた樣に、明きりと而も大膽に走つて居る。

全く此の景觀は常に見馴れて居る我々に又新たな感激を沸かしめずには置かない呈のものである。幾歲そして幾度、あの山、此の峰の頂を目指した事であらう。夫等の山々が今全部雲海の上に聳へ立つて、僕等を見つめて居ると云ふわけである。

風は朝から猛烈で蝶ケ岳で寫眞を撮るのに、手元が風の爲め動いて頗る困つた。それでも二人は幸福に滿ちて小屋へ歸る事にする。

途中昨夜の夫歸連れが來る。女房は途中で參つて置いて來たとの事である。

此の夫婦氏は合同通信の石部さんで、氏の女房が吉澤一郎氏の隱れたる讃美者崇拜者である事が、昨夜小屋で遇然話に出たので判つた。

『登山者アラカルト』是れは熊さんの昨今の事件である。贊否渦

巻く中に彼女は敢然として吉澤氏の説を支持して「登山とスキー」に投書して居る。是れを熊さんと僕が女にも君の支持者が居るれと話した事があつた。その女性なのである。坊主ではないが因縁と云ふものは恐ろしい。ちやんと此の二人が大瀧山小屋で會ふ事が前世から決つて居るのだから。

小屋に歸つて來たのが正午近く、寫眞は撮れたし後は下るばかりであるが、目を遙か松本平へ向けると遙か彼方に霞んで分らない。今日中に彼處迄下らねばならない。今日も又夜道になるのではないかと思つたが、下りは早いからと獨り決めて用意をして愈々下る。此の下り道を昨日あの連中が上つて來たのであるが良く上つて來たなと感心する位永い。昨夜の德澤の比ではない。

又今日も危くなつて來た。鍋冠山を通つて一、七二五米の頂に來ると霞網が張つて居る山小屋があつた。一寸立寄つて休ませて貰ふ。小屋の中は籠だらけで中には小鳥が何百と居る。「隨分澤山捕りましたね」と知つたか振りをすると、小屋の爺は「いやこれは阿だ」と云ふ。こんな山の中へ來ても駄目なんである。孫さんにやられのも無理はないと思ふ。

此一、七二五米の三角點を過ぎて百米も下つた處で又日が暮れてしまつた。道には材木等切り倒して歩けない。實は道が分らなくなつてしまつたのである。一寸戻つて左手澤へ下る途を下る事にする。途は立派であるが恐ろしく一直線に谷に向つて落ち込んで居る。其の途の急な事はお話にならない。道の兩側の草の根につかまつて下る。五〇米程下つてから熊さんが是れは只の途ではない。材木を谷に落す道だ、人間の通る道ではないと云ひ出した。そう今はれると全くその通りで、又上る事にする。處が上る段になると大變である。途の眞中に「ピツケル」を突込んで、是れに體重をもたせて上ると云ふ生れて初めての藝當をした。

馬鹿々々しくて話にならない。人間の通る道でないから引返す處を見ると、僕は別として熊さんもぺんちやんも永の習慣で人間のつもりでやつて居るから面白い。人間のつもりでやつて居るから道に迷つたりする。

又元の道に戻つて來た時、三人とも天を仰いで寢てしまつた。彼方の山の上には營養不良の樣な月が出て居る。まだ八〇〇米下らなければ人家へはたどりつけないのである。

到々又今日も立派な夜道になる。もう毎晩夜歩きすると少しづゝ夜道が見へて來る。此の割合で行くと、夜は見えて晝が見えなくなるかも知れない。それからは元の道をちやん〳〵下つて、足なんか痛んでも一切構はぬ事にする。

到々午後七時過ぎ小倉町役場へ着いて飯田屋へ電話をかけて迎ひの自動車を頼んだ。

以上

園山君の新家庭訪問記を批評して

對話術のコーチに及ぶ

孫一

第一に題名を見て驚いた。あれでは私宛の新家庭訪問報告書である。報告書を貰ふ約束をした覺はない。成程訪問記を私の所へ送るといふ御託宣があつて、それから暫くすると、「增山君から矢の催足で見せる間がないから惡しからず」といふ挨拶があつたが宛名が私になつてるといふ話はテンデ聞いた事がない。私に見せ

ろといふ言葉を、私は「孫さんに加筆して貰つて」といふ意味に丈しかとらなかつた。そんなせんさくはまあどうでもいゝ。が肝腎の記事がまろでなつてゐない。尤も、其點園山君は山口夫妻の好連絡に遭つて手も足も出なかつたと正直に告白してゐる。然し私は鎧太夫の探訪技術乃至對話技術といふものをもう少し高く評價して居た(針葉樹會席上に於ける實績から推して)。それが手も無くやられ、其悲鳴をあげる段になつて、「假に中川さんが……」といふ科白を入れてあるのがどうも面白くない。失敗の第一原因は呼び込みをかけられたことだ。が之は不可抗力として、第二に其後がいけない。「俺は探訪記者だぞ」といふ顔付と、態度が到る所にチラ〳〵してゐる。あれでは相手が固くなつたり警戒したりするのが當り前だ。まろで鎗を目の前に突きつけながら、「突くぞ突くぞ」と云ふのに等しい。相手が鎧兜に身を固め、自然對話がギゴチなくなるのが落ちだ。あゝなつたら園山君、相手の懐に入るのだよ。例へば婦人とスキーの話になつたら高瀬夫妻や、磯野夫妻なんて益々相手が警戒するやうな引例は止めて「私の知つてるさろ勇敢なお孃さんが」といふ工合に關係のない女流スキーヤーの方へ話を持つてけばつい向ふも「第一のお友達にさういふ方がありますのよ」といふ風に和いで來るにきまつてる。又レコード事件にしてからが、一寸聞いた丈で「セヴイラの理髪師序曲」と鑑定する位の知識があるのだから、ドン〳〵話をレコードの方へ進めていけばいゝぢあないか。そゝすると自然其處に一つの雰圍氣が出來る。君のはコレデモカ〳〵と大手門からばかり詰めよるから、敵は益々シツカリ門を閉してしまふのさ。そしてトドの詰りが「女學校の同窓會」といふ「男の子」の最も不得手とする穴に我と我が身を落し込むとは、サテ〳〵餘程逆上したと見える。「中川さんでも矢張り駄目でせうね」とか何とか大見得を切つてゐるが、それが大間違で、第一高女となれば家内がこゝの卒業生會社で私の課の女事務員が第一の十一年度の卒業生だから話題は腐る程あるし、又私は山口夫人の生家に程近い小石川指ケ谷町に大正六年の秋(山口夫人漸く二つか三つの赤ちやんだらう)から同十五年の秋まで約十年間も住んで居た地廻だから、山口邸附近の事件は猫の子の死んだ事迄知つてゐる。一度山口夫人との立會となれば話の種はこん〳〵として盡くる所を知らない。そんな特別のハンディは別としても、君の訪問心構え、對話術に至つてはマダ〳〵卵の殼が尻に着いてゐる。尚數段の修業を要する。さてこゝまで書いてきて、不圖氣が附くと、トンデモナイ事を仕出かしたことが判つた。それはあれを書いた當時の園山君とこれを讀む園山君とはまるで人物が違てゐることだ。それは單に君の貞操上の生理的變化に止らず、新に園山夫人も亦此記事を讀まれることだ。そして今度は、夫の仇とばかり園山夫妻の好連絡の下に私が呼び込まれどんな目に合はされるか判らない。はて、其時、私は誰に宛て訪問記を書けばいゝのかな。

四月の關西針葉樹例會

四月七日(水)北新地●永樂莊にて

小谷部、松木、岡田、中島、齋藤、太田

小谷部全さんが大阪へやつて來たつて云ふので、十一日の例會

日を繰り上げて開いた。

例によつて先づ北濱の如水會倶樂部に集まる。定刻なとうに過ぎても今夜のお客さんと齋藤の顔がみえない。中島の話によると手紙で知らせる筈のところ、ところ書きを紛失してしまつたとかで、わざ〳〵呼びに出かけてゐるのださうな。が、もう來さうなものだと云ふ。八時半をすぎたら、兎に角飯を食べに出かけやうつて相談してゐるところへやつて來る。腹ペコなので、直ぐ出掛ることにする。さて何處にしやうかつてことで又一ト思案、結局この前やつたことのある永樂莊でと話が決まる。助手の居ない圓タクをつかまへると六人ギッチリつまつてゆく。最低料金をキッカリ拂つたら、運チャンの奴、妙な顔付をしてサカテをれだつたつけ。何のためにメーターをつけてゐるのかわからなくなる。

穴のあいた鐵兜の親方みたいな上に牛肉片と輪切りの玉葱とをのせて、オイルでいためて食ふ、いふところのオイル燒をみんなしてつゝき合ふ。

齋藤君の重大？過失が、お客さんを除く五人（勿齋論藤君自身も數に入る）を程以上な腹加減にさせてゐたお蔭でよりうまくオイル燒の牛肉片を味はせて呉れた。何が幸ひするかわからぬ。ケンタンと云ふ點で當地まで鳴り響いてゐるその夜のお客さんは「輕く食事を濟ませて」ゐたと云ふので、これで對抗できると一先安堵したんです。それかあらぬか、日頃の强豪振りを拜見させて頂くことが出來なかつたのは遺憾でした。食ひつ、飲みつ、例によつて例の如き針葉樹會調ハナシに花をさかせて午後十時過ぎ散會した。（DON）

山岳部報告（二、三、四月）

記錄

(1) 鳥海山（三・九—一七）原、岩崎

(2) 遠見尾根天幕生活（三・一五—四・一）小谷部、森脇、小林、森川、鷲崎、大塚、宮城

遠見小屋附近に第一天幕、大遠見山頂に第二天幕、更に天狗尾根二、三〇〇米突附近に第三天幕を設置す。前半は天候に惠まれなかつたが、遂に二八日小谷部、森川のパーティは荒澤奥壁の積雪期初登攀に成功し、又森脇、大塚のパーティは五龍岳に登頂す。尙浪高山岳部員二名の遭難（天狗尾根より雪庇の崩壞によりカクネ里へ墜落）救援に際しては多大の盡力をなした。

日誌

○春山相談會　二月一日(月)　於國立部室

出席者（本科五名、豫科二名）

○上條孫人君歡迎會　二月五日　於新宿美芳

上京中の孫人を歡迎す。試驗直前なる爲極く親しい者のみ集ふ。

出席者　孫人、部員六名

○春山準備會　三月八日(月)　於國立部室

出席者（本科七名、豫科六名）

遠見尾根生活の準備を完了す。

委員の交代により此の三月の報告を以て私の役目も終り、新らしい記錄委員の岩崎君に讓ることになりました。四月の報告か

らは同君が筆を執ることになります。

尙私共は來る七月中旬頃に過去一年半（昭和十年九月—十二年三月）の部の活動をまとめて「針葉樹」第九號を發刊致すことゝなりました。今度は編輯方針も從來とは相當變へ、頁數も大體百四五十頁で、費用も出來るだけ廣告料の收入のみでやつてゆく心算です。新學期早々協議の上仕事に取掛り五月一杯に原稿をまとめ、七月中には皆樣の御手許に御送りすることが出來ると思ひます。尙先輩諸氏より「針葉樹」發刊に關し御意見なり御注意なりを賜ることは私共の等しく切望する處です。而して又常の如き絶大なる御援助を願ふものであります。

（四・二　望月記）

記錄

(1)歡迎登山　大藏高丸（四・二四—二五）望月、小谷部、小林、森川、鷲崎、佐々木、原、岩崎、大塚、日江井、齋藤、宮城、里見、高橋

（新入部員）小泉三郎、木島利夫、山田亮三、久保孝一郎、八藤雄一

天候惡しく、豫定の如き山上のコンバは望めなかつたが、田野鑛泉で落着いた懇親會を行つた。

(2)富士山（四・二五—二七）森川、佐々木

ゾムメルシーで殆ど頂上から滑つた。

(3)八ヶ嶽（四・二五—五・一）望月、岩崎、大塚、日江井、高橋、里見

行者小舍を中心にして赤岳、横岳等のパリエーションを登高した。雪は小舍の附近で約五尺。

日誌

○委員會　四月十三日（火）於國立部室

出席者（本科七名、豫科一名）

今日決定を見たものは、新入部員歡迎會及歡迎登山の件であつた。

○春山報告會　四月十四日（水）午後三時より於部室

出席者（本科七名、豫科五名）

遠見尾根合宿、鳥海山行について說明。尙ほ前日內定の歡迎登山の件を正式決定す。

○新入部員歡迎會　四月十六日（金）於部室

出席者（本科八名、豫科七名）

新入部員（豫科）久保孝一郎、小泉三郎

（專門部）原田秋德

今日の歡迎會には新人の出席が極めて少なかつたが、次の歡迎登山に多數參加の見込があるので、皆愉快に懇談した。

○豫科懇談會　四月二十三日（金）於豫科部室

先日の歡迎會の補充の意味で、今度は豫科に於て行つた。

（岩崎記）

消息

高見　要君　三月二十五日華燭の典を擧げ、室蘭市常盤町一一八番地に新家庭を營む。夫人の御名はちえ子樣と申し上ぐ。

矢作太郎君　神田區宮本町三番地に轉居。市電にて神田明神前下車、電車通りなる由。

渡邊九郎君　杉並區永福町三四六ノ一に轉居さる。

尙同君の屬する四趣會の畫展は、四月十六日より十八日の三日間、銀座伊東屋に於て開催された。山の寫生畫多く、同君は信州親湯の朝、秋の蓼科高原、猿ヶ京溪流、早春の丹澤山等十點ばかり出品、石井柏亭畫伯の好評を受けた。賣上又意外の好成績なりしと。

定例集會　四月の定例集會は都合により行はれなかつた。

關西針葉樹例會　四月七日(水)　別項記事參照。

編輯後記

どうにかこうにか學校を卒業することが出來まして、ヤレ安心モウ試驗はありますまい、と思つた瞬間に增山さんから會報編輯の役目を仰せ付りました。のんびり例會に顏出ししたかつたのですが、針葉樹會の仕事に言譯を立てゝ逃れることは、合宿に口實を設けて不參すると等しと考えまして、編輯技術の巧くないのを知り乍ら惡場にぶら下る山育ち宜敷く、この大役を引受けました。缺點の多い事は前以て御許しを願ふ次第です。

さて山口さんの御言葉通り國寶的編輯者たる增山さんの後を引受けます事は、そゝつかしいこの新米幹事にとりましては仲々難行であります。但しレベルを低くする抔は實に人倫に叛し、天道の公理に背くと申すもの、從來通り八頁にて體裁不變、エンヤラヤと盛り込み度く存じて居ります。就きましては幹事相變りましても原稿だけは相變らず、言ひたい事、書き度い事をものして送つて戴き度いと存じます。えゝ筆めが兎角横着で指の先が鈍るわい、と申されますと、會報の出足も遲れざるを得ませぬ次第。吳々も御投稿の程御願ひ申して置きます。

最後に編輯上のことに就き、厚き御指導を賜はりました增山先輩に深く御禮を申し述べます。(柿原記)

會費納入方の御願ひ

物價の昂騰、郵便料の値上げによりまして會報の印刷費や發送費が嵩んで參りましたので、此際會費未納の方は至急納入方御取斗ひ下さる樣御願ひ申します(年額在京會員六圓・地方會員三圓)。

手持「針葉樹會報」ブックナンバー

此度手塚氏の御手許に在りました會報の舊號を引繼ぎ、その處分法を委ねられました。欠號のある方は幹事迄御申越下されば、御送附申します。

第一年　一、三、四、五の各號
第二年　一、二、三、五、六、七、八、九、十の各號
第三年　一、二、三、四、五、六、七、八、九の各號
第四年　一、二、三、四、六の各號
第五年　二、四、六、七、八、九、十一の各號
宮川雄三郎君追悼號

名簿發行に就いて

昭和十二年度の會員名簿を六月中旬迄には發行致し度く存じます。住所變更等未だ御知らせ無き方は、至急右迄。

東京市日本橋區大傳馬町貳ノ四
柿原謙一